

複言語使用者は日本語・日本をどのようにとらえ、 どのように向き合っているか

三宅 和子 (東洋大学文学部)、岩崎 典子 (ロンドン大学 SOAS)、川上 郁雄 (早稲田大学大学院日本語教育研究科)

要旨

世界的な「移動の時代」を迎え、日本語話者や日本語学習者を取り巻く状況は変化と多様化が進行している。本パネルは、異なる言語環境下で複数の言語を使用しながら生きる人々の日本語使用と日本文化に対する意識を考察し、母語話者と学習者という二分法を超えた時間的・空間的動態性の視点から日本語を捉え直す。三宅は、英国に永住する国際結婚女性をとりあげ、日本語・日本文化の保持・継承の願いとアイデンティティ形成の関係を、社会の変化と関連づけながら考察する。岩崎は、複数言語・文化の背景をもつ英国の大学で日本語を専攻した日本語「学習者」をとりあげ、その日本と日本語への理解とまなざしの変遷の分析を通して、複言語・複文化能力が言語学習に果たす意味を考える。川上は、幼少期より複数言語環境下で育ち、日本語を母語とする日本在住の非日本国籍保持者をとりあげ、彼らの複言語・複文化状況、アイデンティティ、言語教育のあり方を考える。

【キーワード】 日系ディアスポラ、複言語・複文化、アイデンティティ、言語ポートレート、移動する子ども

国際結婚女性の複数言語・複数文化状況の変化とアイデンティティ

三宅 和子 (東洋大学文学部)

1 はじめに

第2次世界大戦後、日本の政治経済的発展と国際社会への参入の歩みを背景に、自らの意思で越境し、長期にわたり海外に在住する日本語話者たちの存在が認められる。近年のグローバル化の波はこの動きに拍車をかけており、日本語話者たちの日本語保持・継承や日本との関係は今、これまでの想定とは異なる新しい段階に入っている。この新しい動きの渦中の人々は、ハワイや南米などに渡ってコミュニティを形成・維持してきた「日系移民」とは異なるカテゴリーを成す。筆者はこれらの人々を日系ディアスポラと名づけて研究している(三宅 2014a)。越境する日系ディアスポラの早期の例として、本稿では1960年代、70年代の高度経済成長期にイギリスに渡った女性たちを中心に、高齢の国際結婚の永住者10人を取り上げる。日本という物理的空間から離れた日本語話者が、日本語と日本文化の保持と継承をどのように願い、日本をどのように見てきたか、またそれが自己アイデンティティとどのように関わっているかを考察する。

2 研究の背景

国外の日本語使用者の研究はこれまで、ハワイや南米などの日系移民の研究¹や、移民言語の研究において成果の蓄積をもたらしてきた。また近年になり、東アジア、東南アジア、サハリン、ミクロネシアなどの残留日本語研究が盛んになってきている(朝日 2005-2007、真田 2006-2009 など)。本研究はこれらの研究とは一線を画し、グローバル化の中で浮上してきた新しいタイプの海外移住者の社会と言語の問題を扱っている。

高度成長期以降にイギリスに渡った日本人の高齢化は進み、老後の過ごし方や死やお墓の問題のほか、加齢や認知症で喪失しがちな英語力やコミュニケーション不全、孤独への不安も抱えている。これら高齢者の多くが国際結婚して永住する女性たちである。外務省領事局政策課(2012)によると、2011年現在、海外に在留する日本人は1,182,557人、永住者数は399,907人(全在留邦人数の33.8%)を数える。イギリス在留者は63,011人で、その半数以上の36,717人がロンドンに在住している。そのうち永住者は12,000人で、その8割以上がイギリス人男性との国際結婚女性であるという。

海外に暮らす新しいタイプの日本人の研究としては、ビジネスマンや駐在員の研究があるが(Sakai 2000、平高 2011-2013 など)、日系ディアスポラ、特に国際結婚女性の実態の研究は緒についたばかりである。日本を離れ、イギリス人と結婚してイギリス社会の中で生き、高齢を迎えている日本語使用者の言語行動の究明は、複言語環境のなかでの日本語を考える上で多くの示唆を与えてくれるだろう。

3 調査

3.1 調査概要

2013年3月、ロンドンにて、国際結婚をした日本語話者10人に対し半構造化インタビューを行った。ここでは1960～70年代に離日した女性(以下「第1グループ」)と、1990年以降に離日した2人(以下「第2グループ」)とを比較しながら考察する。前者のほとんどは20代で日本を離れ、子供たちもすでに成人して家庭をもっている。後者は50歳を過ぎて離日し、子供はいない。離日時の日本社会と英国社会のあり様と、それぞれの社会環境が、その言語生活を左右している。

3.2 社会変化と渡英

ロンドンに現在、日本人在留者数では世界第4位にあり、多くの日本人が住んでいる。長州五傑²でも知られるように、明治初頭から留学生、そして役人や商人が訪れ、日本人コミュニティを形成していった。しかし第2次世界大戦で敵国となるとコミュニティは崩壊し、戦後も日本人数が大幅に増えることはなかった(Itoh 2001)。1964年の「旅券法改正」は、その状況を大きく転換するきっかけとなった。日本人の海外渡航は1964年まで強い規制を受けており、業務や視察、留学以外は認可が難しかった。しかし1964年の自由化で、仕事以外の海外旅行が増加していったのである。時代は高度成長期。1964年には東京五輪が開かれ、海外への憧れと興味が大きく広がった時期である。今回インタビューした第1グループはこの時期前後に多く渡英している。

図1は10人の女性たちの離日年、結婚年、出会った国と年をまとめたものである。64

年以前に日本国籍を捨てて渡航した TM をはじめ 60 年代に離日した 5 名は、いわば日本で「見初められ」て海を渡った女性たちである。70 年代に仕事や勉強のために渡航した NC、EC、MR らは、現地で夫に出会って結婚している。

90 年以降に渡英した 2 名の背景となる社会状況は、これとは大きく異なる。80 年代の経済発展とバブル期を経て、イギリスの日本人数は大きく増加していた。MW は後に夫となる男性と 1959 年に出会っていたが、長年務めた造船会社を 55 歳で早期退職した後再会して結婚に至る。KT も 50 歳を境に自主退職し、イギリスで日本語教師養成講座を経て教え始めた頃に結婚している。

第 1 グループ				第 2 グループ			
旅券法 64 年改正 →海外渡航の自由化				国籍法 84 年改正、85 年施行→母 親も日本国籍を子に与えられる			
離日年				結婚年			
1960	1970	1980	1990	2000			
61 65 66 68	71 72 77		90 96				
TM24 MM23 LT28 NC25 RP22	EC27 CW25 MR31		MW55	KT53			
結婚年				出会年・国			
1960	1970	1980	1990	2000			
60 63 64 65 66	72 74 75 79	85	90				
TM23 MM21 LT28 RP23	CW25 NC31 EC31 MR33		MW55	KT57			
出会年・国				結婚年			
1960	1970	1980					
59 60 61 64	70 72 78						
MW24 TM22 MM20 RP21 スペイン 日本 日本 船	NC27 EC28 MR32 英国 英国 英国		KT53 英国				
	LT26 日本	CW25 日本					

(イニシャルは女性たちの仮称、その後の数字は当時の年齢)

三宅 (2014b) を改編

図 1. 離日年と結婚年

3.3 日本語の保持

長い人で 50 年を超す英生活で日本語はどのように保持され、日本の情報はどのように得られてきたのだろうか。第 1 グループは当初、日本人に会ったり話したりする機会が極端に限られていた中で、日本と日本語に飢餓感をもった体験を共有する。日本の家族や友人とは手紙でのやりとりが中心で、通話料の高かった電話は日常的に使えるものではなかった。子供の成長をみて日系企業などで働く機会を得、再び日本に触れていくという経過をたどったケースが多い。日本語の保持はできているが、語彙の選択や言いよどみなどに英語の影響を感じさせることもある。

NC : ケントに行った時だけが日本語話せなくて、もう一やっぱり日本語に飢えちゃってそんな時お金もないからロンドンにも行けないしね。オフデーにロンドンに行ったり(中略) だからその時に日本の新聞が手に入ったらもう隅から隅まで読んで声に出して読んでました。

MM : こちらですっとイギリス人とばかり話してて、英語でやってたでしょ？そうするとほら、やっぱりなかなか全部話せないじゃない？それで日本人同士で会って、もう全部話してくると、一日話してくるとくたくたに疲れたの覚えてる {笑} それも年に2回とか3回ぐらいしかそういうことできなかったから。

CW : そうですね。だから、あの頃、あの一、日本人だっていうと、もうそれだけで友達になっていた。(中略) それだけが理由で、バックグラウンドも知らないでお友達になっちゃったから、怖い目に、怖いっていうか、ものすごい裏切られたっていうこともありましたですね。

一方、第2グループが渡英する90年代には日本語環境が大きく変化していた。今では、JSTVに契約すれば日本のTVを1日中見ることができ、ロンドンの主要な日本店に置かれているフリーペーパーから情報が得られ、無料で近い電話やメールで日本の家族や友人と話ができる。日本食をはじめ日本のものはほとんど手に入り、日本語に日常的に触れる機会がある。同じ高齢者といっても、第1グループとは異なる時代を生きてきたのである。

3.4 日本語の継承

日本語の継承に関しては、子供をもつ全員があきらめざるを得なかった。継承されにくかった最も大きな要因は国籍問題だと考えられる。子供たちは全員イギリス人だったのだ。日本は1984年まで父系血統主義をとっており、子供に国籍を与えられるのは父親のみであった。1984年に法律改正、85年の施行を経て母親も国籍が与えられるようになり、21歳で国籍を選ぶまで日英の二重国籍が可能となった。「女が国際結婚をすると子供は日本人になれない」という現実から解放されたのである。が、図1からも分かるように、85年には第1グループの子供たちは思春期前後の年齢に達していた。イギリス国籍しかなかった子供たちも早急に手続きをすれば日本国籍が得られた。しかし、今さら日本国籍を得る必然性や緊急性が説得的に迫ってこない時点に子供も親も来ていたといえよう。

日本語環境も整っていなかった。日本語を話すのは母親だけである。周りに日本語学校もない。子供が成長するにつれ、日本語を話す努力をさせること自体が至難の業となっていく。日本語の価値も知名度も低い当時、日本語は学ぶにはハードルが高く、使えることの意義は見出し難かった。様々な社会的かつ個人的な事情が継承を妨げたことがわかる。

MM : 日本語はもうお母さんとしか通じないっていうの分かってくともう英語で話すようになるでしょ。(中略) 日本に子供連れて行って3ヶ月ぐらいいると、子供ももう日本語覚えちゃうのよね。それで覚えちゃうんだけど、ああ、これで上手くいくかなと思って、こっちに連れて来るでしょ？飛行場からもう英語なのよ {笑}。

TM : その頃は、子供が、上2人が大きくなったので、日本の補習校に入れてもいいなと思ったんですよ。ところが、入れないんです。(中略) 補習校は、あー、ちゅう、駐在員の子供でないと入れなかった。っていうのは日本語が分からない、日本語の話せる人達しか入れなかつ

た。だから入れたかったんですけど、入れなかったんです。

EC：そうですね。その前はね、その子供を育てるのに、2つの language では子供が confuse するとね。ですからその一、1つの言葉で教えると。特に娘は問題があったのでね、もう英語で育ててくださいということですね、もう向こうの病院とかなんかはもうすごくそれを強調しました。

LT：で主人はね、いうんですよ、子供にどうして、あの一日本語教えないかって、だけど、自分であの一英語を、あの一、自分、は、母親自身がね、英語をあの一、勉強、ね、うまく、しゃべれるように、あの一してる所に、両方でできない人。そうでしょ、(中略) だから一あの一、もちろん、あの一商社の方々なんか、あ日本、子供を、土曜日学校とか、あの一送ってますよね。だけどそんな余裕なかった。

CW：あのねえ、6歳、まで話してたんです日本語。(中略) 全部日本語で、話して、彼女も、日本語で(中略)ベルギーで。そしたら、ある日、とつつぜん話さなくなったの、どういうわけか。(中略)「どうして日本語話さないの？」って言ったら「シェパ〜」とかっていつて。「シェパ〜」か何が「シェパ〜」かと思って。それで一、なんかそのうちにフランス語になっちゃって2人で。

3.5 日本への思いと自己の位置づけ

インタビューした全員に若い頃から海外への憧れや一度住んでみたいという思いがあった。第1グループはそれを早期に実現させたが、第2グループは、日本で長い年月を過ごした後に日本を去った。そこには若い頃からの夢を実現させたいという思いと共に、日本で感じ続けた生き辛さがあったようだ。第1グループでも30歳を過ぎて渡英したMRも同様である。

MR：独身の、独身でいつまでも親元に居てっていうと(中略) あの、けっこう、あの、いい年だから、なんとなく居心地が悪くなってきたんです。職場ではそうでもないけどでもなんかちよっと。

MW：うん、つってもあたしは、その頃、{笑いながら} 変な女だったから。突っぱねてましたけどねえ。(中略) 会ったこともない人の、子供の学校入ったからとかって、義理、義理っていうんですか？そういうの。それが多いから。私そういうの、ほんとにしたいだ、人だと思いたいと思う、人間ですからね。(イギリスは) そういうのがないしー、まずプライベートの中に入ってこない？のが好きですね。でも夫婦だってそうでしょ？入ってもらいたくないってこと、あるじゃないですか。だからあたしはやっぱ {笑いながら} 変わってんですかね。

KT：あの、年に1回、だいたい帰ったときには、親しかった友達とは会いますけれど、やっぱり、学生時代の友達はあまりいませんね。小学校、中学、高校の友達とは、あの一私も、私自身もいけなかったんでしょうけど、とても嫌な思いをしますから。(中略) もう一、ね。噂とか。会社に居たときも、そうですね。今なんかだったらいじめになるのか、あの、パワ、パワハラメント。

第1グループは子育てや仕事から解放され、日本への帰省や旅行する機会を楽しんだり、友人と旧交を温めたりしているが、日本に再び住む気はない。イギリスに家族がいるからだけではない、日本社会に対する心理的な距離感や違和感がにじみ出る。

MR：違っていえないかもしれないですけど、なんとなく、こっち側のもうあの基礎が、こっち側の雰囲気になっちゃってるので、日本でちょっと暮らしぶらいいかな。まあ日本に行けばそのように暮らせるでしょうけどね。だから日本のお友達も大事だし、あのいつまでもお友達でいて欲しいけれども、そう、だからといって日本に帰る気はないですね。

MM：今でも、今はもうあの、2年に1回ぐらいずつ日本に帰ってくるけどね。余生、それこそ最期の5年ぐらい日本で過ごすかって、それで日本で死ぬかっていう気はあんまりないね。(中略) やっぱりその、日本の古来の、何ってすぐ今例出せないんだけどね、頑なにその日本の狭い考えが時々兄の中から出てきて私はもうそういうのも卒業してこちらにいるからね。なにお兄さん、そんなのまだ考えているの？なんていうと、当たり前じゃないかなんていうと、ああやっぱり私は日本住めないっていう…

とはいえ、長い英生活の中で頑として守られている日本的なものがある。全員の家庭で日本食が日常的に登場し、家族の絆の1つになっている。風呂、上と下・ウチとソトの区別、清潔感、謙虚さなどを語るとき、日本的な生活様式や規範を守る矜持さえ感じられる。

KT：やっぱり日本人の良い所ってあるじゃない？謙虚になって、人に、人の一人のこと思いやるとか、そういう面を大切にしたいと思ってます。そうじゃない人もいますよね。

RP：あの笑わないでくださいね。(中略) 何人このロンドンというかイギリスにね日本人住んでるのか知りませんが、多分、40年もねあのぬか漬けているのは私ぐらいだと思います。

RP：お風呂はね、これはもう毎日。〈お皿の泡は？〉もう理屈抜きでちゃんときれいに流しています。〈布巾と下着をいっしょに洗えないとかは？〉うん。〈靴は脱ぐ？〉もちろんです。だいたいスリッパがあるでしょ？

TM：お風呂に入るんでも私は上と、下と、同じ、あの一、タオルを使いません。昔は母がそうでしたやはり。身体を使う、タオルですか、と下の方、足とかそういうとこに使うタオルは別でした。

4 おわりに

本稿は国際結婚をしてイギリスに永住する日本女性に行ったインタビュー調査をもとに、高度経済成長期前後に渡英した第1グループと90年以降に50歳を過ぎて渡英した第2グループを比較しながら、日本語・日本文化や日本観とアイデンティティとの関わり方を考察した。自らの意思で離日イギリスに永住している女性たちの個人的背景は様々である

が、その人生の選択には社会変化が大きく関与していること、そして日本に対する距離感とともに、日本文化や日本人性に関してのこだわりを持ち続けていることが、自らのアイデンティティを支えてきたといえるだろう。

今回の調査対象は、戦後高度成長長期時代に自分の意思で海外に渡り、高齢期を迎えている日本人のほんの一握りの例である。世界に散らばるこれらの日本語話者の実態はほとんど知られていない。その言語行動の究明は、グローバル化社会におけることばの位置づけや複言語環境における日本、日本語を考えるうえで、興味深い示唆を与えてくれると考えている。

注.

1 日本移民学会には多くの研究の蓄積がある。

2 長州五傑とは、幕末期の1863年、禁を犯して渡英しロンドン大学で学んで近代日本の礎を作った伊藤俊輔（博文）をはじめとする長州藩の5人をさす。

<参考文献>

Itoh, K. (2001) *The Japanese Community in Pre-War Britain: From Integration to Disintegration*. Richmond, Surrey: Curzon.

Sakai, J. (2000) *Japanese Bankers in the City of London: Language, Culture and Identity in the Japanese Diaspora*. London: Routledge.

朝日祥之 (2005-2007) 「サハリンに残存する日本語の地位に関する研究」科学研究費補助金 若手研究(B).

外務省領事局政策課 「海外在留邦人数調査統計 平成24年版」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebPrint.pdf> (2013.10.1).

真田信治 (2006-2009) 「東アジア残留日本語と日本語諸方言の相関に研究」科学研究費補助金基盤研究(B).

日本移民学会 <http://www.gssm.musashi.ac.jp/research/imin/nenji/2014.html> (2013.10.1).

三宅和子 (2014a) 「在英日系ディアスポラの言語生活—国際結婚した日本人女性とコミュニティの形成—」『文学論藻』88, pp.45-63, 東洋大学.

三宅和子 (2014b) 「海外における日本語・日本文化の継承はアイデンティティとどう関わるのか—国際結婚女性の過去と現在—」『社会言語科学会第34回大会発表論文集』, pp.170-173, 社会言語科学会.

ある日本語学習者の日本・日本語観の変遷：曖昧さをめぐって

岩崎 典子 (ロンドン大学 SOAS)

1 はじめに¹

日本語教育において「文化」や「日本事情」を一般化し固定化した情報として扱う本質主義的な見方が問題視され、日本語や日本文化の多様性・雑種性や流動性に目を向ける必要性が唱えられて久しい(川上 1999, Kubota 2003, 細川 2002)。日本語教育の現場では、

学習者自身に「自分の観点からのそれぞれのことばと文化を発見させ、そこで自分なりの学習の手がかりを捉えさせる手助けをする」(細川 2002: 69)、または、「日本文化のイメージを共に探求し、共に練り上げて行く」(川上 1999: 24)必要性が提唱され、学習者の観点から見た「日本」や「日本語」に目が向けられている。

「文化」の大部分が「自らと他者に関する認識に基づいて構築された社会的複合概念 (social construct, the product of self and other perceptions)」(Kramsch 1993: 205)であるとする、学習者それぞれの背景や経験により多様な日本・日本語観があるだけでなく、経験の積み重ねによって変化すると考えられる。

また、複数の言語や文化を背景にした日本語学習者の場合、既知の複数の観点を考慮しつつ日本を見ると考えられる。標題では便宜上「学習者」という言葉を用いているが、本稿では、いわゆる日本語「学習者」を、文化や言語を学ぶ受け身的な主体として捉えず、自らの複文化・複言語資源を総動員して社会的に行動する複文化複言語使用者(Zarate 2003)と捉えたい。

さらに、日本に留学して日本で暮らすという経験は、日本観構築に影響する可能性が高い。しかし、留学生(留学中、または経験者)や日本語専攻の学生の日本観に関する調査・研究は少なくないものの、日本への留学生数が多い韓国(例えば、岩井他 2008)・中国・台湾(例えば、守谷他 2011)からの留学生に関する調査・研究がほとんどのようである。

そこで、本稿では、英国で日本語を専攻したある大学生が、留学前、留学中、留学後、さらに、日系企業就職後、日本人や日本語をどのように捉えたかを探る。

2 本調査

2.1 研究の背景

筆者は、英国で日本語を専攻した8名の学生の日本・日本語観を言語ポートレート(姫田 2013, Krumm 2011)や1年間の留学の前、留学中、そして留学後のインタビューを通して探索的調査をしてきた(岩崎 2013)。参加した8名すべてに共通していたのは、彼らの「日本観」は、即ち「日本人観」で、日本人との接触によってイメージを構築していたことだった。本稿では、その中で、サム(仮名)を取り上げ、4回の半構造インタビューに基づき、サムが体験した日本人・日本語の曖昧さをめぐる葛藤を考察すると共に、サム自身の日本語観の核となっていた曖昧さという視点から、言語の使用も見る。

2.2 方法

サムは、米国出身の母親を持つ言語学習の好きな英国人で、高校で日本語学習を始め、高校生のための交換プログラムで初めて日本を訪問し、3回日本を訪問した。大学入学前にも9ヶ月日本に滞在したのち大学で日本語を専攻し、3年めで1年日本に留学した²。1年間の留学を終え、英国の大学に戻った段階で、身体の形の上に記された言語ポートレートには、日本語と英語の他にもフランス語、ポルトガル語、古典ギリシャ語やラテン語が、それぞれ体の部分に配置されており、サムの複言語レパトリーが現れていた。脳には英語が、しかし、心臓、口、利き腕の右手には日本語が配置されており、サムの日本語と日本語を使うことへの熱意が示されていた。2013年には大学を卒業し、秋より日系企業に入社し、東京で仕事をしている。

半構造インタビュー(各40分~1時間)は、サムの留学前(2011年6月)、留学中(2012年2

月)、留学後(2013年10月)と就職4ヶ月後(2014年2月)に行われた。言語はインタビュー開始時に学習者自身が選択するという方法を取ったが、サムの場合は、4回のインタビューのうち、第1回目以外は日本語で行った。インタビューの質問のうち、本論で主に取り上げるのは以下に関係する質問への応答である。

- (1) 日本、日本人、日本語と聞いて思い浮かぶ言葉3語ずつとその理由(留学前・後)
- (2) 日本人のコミュニケーション・スタイルはどういうものか(留学前)
- (3) 自分の日本・日本人・日本語のイメージに変化があったか(留学中、留学後、就職後)

サムは、留学前、留学後の日本人観・日本語観の中で特に「曖昧さ」に注目していた。そこで、サムの観点から見た日本語の「曖昧さ」について考察し、サムの「曖昧さ」への見方と態度、さらに対応(サム自身の「曖昧さ」の扱い)の変遷をみて、日本語使用者としての成長をみる。

3 曖昧さ

3.1 思い浮かぶ三つのことば

サムが留学前に日本と聞いて思い浮かぶ言葉として挙げたのは、*sushi, sunset, friends* で、留学後は、「夏、居酒屋、友達」であった。サムの焦点は常に対人関係にあり、日本という国で思い浮かべるのは、日本で接した友人、友人と過ごした場所のようであった。日本人について留学前に挙げた言葉は、*smiling, bowing, friendliness*、日本語については *kanji, keigo, (its) sound* だった。留学後は、日本人については「笑顔、曖昧、礼儀」を、日本語については、「漢字、ひらがな、曖昧」を挙げた。従って留学後に大きく取り上げられたのは「曖昧」であった。

しかし、留学前も、3つの言葉になかったものの、抜粋1と2に見られるように、日本人のコミュニケーションがどういうものかという問いに関しては、やはり、曖昧さと、曖昧さに深く関わる本音と建前に注目していた。

抜粋1 I think people say a lot less in Japanese, not necessarily by words, but it's like if you translated exactly word for word what a Japanese person says, it would seem quite vague, I think, to Western. People in England and America get very very impatient if they don't know every piece of information whereas in Japan, you can just say something little and I think usually people will, kind of they can guess what you are really thinking.

抜粋2 I think there are these concepts of *honne* and *tatemae* which I am very interested in, and we don't have words for them in English and they do exist and people, maybe it's similar in some ways to white lies I think. But they are, it's a little bit different. But I think people use them more in Japanese than they do in English and maybe in Japanese it is considered as good thing to sometimes cover your emotion to, if it's gonna avoid a fight or avoid conflict, whereas sometimes it's really generalization but in the West, West people might think that even if you have to fight that's fine, it's better to have a conflict and then have a compromise so that both people get half of what they want, and that doesn't mean it's true for everyone but I think just on average maybe that's more common in England than it is in Japan. I think.

3.2 留学中

インタビューの言語として日本語を選択したあと、英語と日本語では、自分の話し方などが変わってくるかたという問いに対し、再び「曖昧」を取り上げていた。しかし、抜粋3では曖昧さを日本人らしさと関係づけ、自分も曖昧さを好んで曖昧に話すと語る一方、抜粋4で、日本のイメージが悪くなったという理由は、曖昧表現とも関わる、本音を言わず「感情を隠す」ことであると語っていた。しかし、イメージが悪くなったという内容を、曖昧さに直結する緩和表現を駆使して伝えており、サムが述べる通り、曖昧に話していた。

<抜粋3>

サム：まあ、別に、あの、もちろん本音を伝えることは、もちろんできるんですけども、えー、ただ日本語で話しているときは、あれですよ。もうちょっと、うーん、曖昧な言葉が多くて、そういう答えがあったりする気がします。

岩崎：どうしてだと思いますか。日本語で話すときはどうして曖昧になると思いますか。

サム：やはり、まあ、自分、自分だけなんですけども、その、ある言葉で話すときはその言葉だけじゃなくて、その文化にも、あの、入らないと、あの、うまくコミュニケーションとか取り合ったりできないので、その日本人みたいになって、日本語を話すのが一番上手になるんじゃないかと思いますし、やはり英語で話すと、その欧米の人とかイギリスとかアメリカ人みたいになって、その文化に入って、えー、話した方が、まあいいんじゃないかなと思います。

岩崎：そうすると、日本人みたいっていうことの中でやっぱり曖昧っていうことは非常に大きいキーポイントというか。

サム：はい、それはありますね。あと、自分も結構曖昧の、あの、曖昧が好きなんですけど、英語で言うと、あの、なんていうんですかね。その、うそつきとか言われたりする。でも日本語で言ったら、言葉がうまいとかそういうこと言われるので、やはり日本語のほうがその曖昧が、あの、まあ、合う気がします。

<抜粋4>（緩和表現をゴシック体で示した）

やはり、うーん、まあ、たまに日本、実は自分の日本についてのイメージが少し悪くなったんですけど、そんなに悪くはなっていないんですけど、少しだけ、その、思ったより、やはり、あの、まあいいことでもあるけど、悪いことでもあるので、結構言いにくいんですけど、その、うーん、まあ、感情を隠すとはちょっと関係があって、やはり、すごく優しくしてもらったことが多いんですけど、やはりそれは、ただ優しい人だからではなくて、ただ、うーん、やるべきだったからっていうことを聞いて、やはり優しくしてもらったのはたぶんまあいろいろあったかもしれませんが、やはり、うーん、ただ、あの、最初に思った理由とは違ったので、あの、で、そういう意味ではやはり感情とか、まあ、隠したりするのは全然よくないと思ったんですけど、でも逆に絶対に隠した方がいいときもあるから、あの、悪いことでもあるけどいいこともいっぱい、あの、まあ、あるということですね。

3.3 留学後

留学後のインタビューでは、留学中に感じた日本の悪いイメージについて再び考えを聞いたところ、抜粋5のように、「曖昧さ」を、「はっきり言わないこと」と捉え、その是非にいての考えをまとめ、緩和表現を駆使しつつ、日本人に「曖昧さ」を使うべきところと

そうでないところを見極めてほしいという意見を表明していた。

<抜粋5> (緩和表現をゴシック体で示した)

あー、それは、**やはり**今になって、悪いところでもあるし、いいところでもある**と思います**。なぜかという、その、**ま**、ときどき絶対に、まあ、相手に傷をつけないように、えー、なんていうんですかね、本当のことを言わない方がいい**とは思いますが**。しかし、んー、ま、すごく仲のいい友達とか、ま家族であれば、ま、勿論その傷をつけても**やはり**その本当のことをいったほうが、**いいのではないかと**思って、その、あー、ま、本当の気持ちとか、本当に考えている、考えていることを**隠さない方がいいときもあるか**と**思って**、えー、で、その、曖昧があれば、納得がいかない、**い**かないような**気がして**、ちょっと、ま、イライラすることもある**かもしれ**ません。(中略)でも人にもよって、その曖昧なことをずっと言っている人もいるし、で、絶対にその自分の考えていることしか言わない人も、日本人でもいるし、もうどこにいてもいるかと、えー、思って、んー、ま、**別に絶対に悪いことだとか絶対にいいことだ**っていう、**まあ、ってはいわ、言えないですが**、んー、その使うべきところ?を、えー、**まあ**使うべきところ、とき、ま、ちゃんと分かってもらいたい**な**って**いうふう**に**思**ってますけど。

留学中は、曖昧さを日本らしさとして受け入れていながら、本音を言わないことへの不満も感じるなど、やや矛盾した意見を述べていたが、留学後には、曖昧さの是非を語り、状況を見極める必要性について意見を表明している。曖昧について言うべきことは言うということで、自分自身の考えを实践しており、その実践に再び緩和表現を駆使している。

3.4 就職後

就職後のインタビューでも、曖昧表現についても質問した。留学後の意見に関係して、就職先の日系企業の職場で曖昧さのためにわかりにくいことがあるかという質問に対し、日本語を英語に訳して英米の会社にメールを送るという仕事の中で、日本語では「はっきり言わなくとも、なんとなくわかること」を英語に訳すことが難しいと語っていた。

しかし、すでに抜粋5で曖昧さが日本人や日本語に特有のものではなく、また日本人全体に当てはまるわけでもないということが述べられていたが、抜粋6に見られるように、その意識がいつそう高まっていたようである。

<抜粋6>

英語なのに、依頼したことをすべて答えてくれているわけじゃなくて、一部だけ答えが来たとしたら、そもそも依頼したのは他の日本人なので、一応、もらった英語の返信を日本語にして、依頼した日本側の人に送るんですけど、あまりはっきりしないので、アメリカの方にもう一度お願いしてくださいと言われることもたまにありますので、なので、日本語だから曖昧っていうわけではない**と思**います。その、人それぞれの言い方とか、書き方でもある**か**もしれないんですけど、ちゃんと質問に答えていないことも、日本人でも、アメリカ人でも、イギリス人でも**あると思**います。

4 まとめと日本語教育への示唆

サムが日本人と日本語のイメージの核となっていたのは曖昧さであった。曖昧さの利点

は衝突を避けることであると考え、留学前は賞賛していたが、留学中には、「悪いイメージ」を持つこともあった。しかし、留学後は、曖昧さの利点を評価しつつ、曖昧さを使うべきところを知ってほしいという意見表明をしていた。そして、意見表明をするという選択を、緩和表現を数多く用いて実践していた。

また、日本人との接触が多くなるにつれ、実は、日本人間でも個人差があるだけでなく、曖昧さが問題になるのは、日本語・日本人に限らないという意識が高まっていた。

日本語教材では曖昧な表現は、日本語の特徴であり、丁寧な望ましい表現として導入されることが多い。しかし、曖昧さの問題点や多面性、そして、日本語話者間の多様性をクリティカルに分析する力を養うことが必要だろう。

注

¹ この調査には明治神宮日本研究助成金をいただき、インタビューの文字化を進めることができた。助成金でこの調査を支援してくださった明治神宮国際神道文化研究所をはじめ、研究の参加者、丁寧な文字化をしてくれたアシスタントの行木瑛子氏、有益なコメントをくださった会場の方々にも感謝の意を表したい。

² 英国の大学では原則として言語を専攻する学生は1年間の留学が必須となっている。

<参考文献>

Kramersch, C. (1993) *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: OUP.

Krumm, H. J. (2011) 'Multilingualism and subjectivity: "Language portraits", by multilingual children' in Zarate, G, Levy, D., & Kramersch, C. (eds.) *Handbook of Multilingualism and Multiculturalism*: 101-104, Paris: Éditions des Archives Contemporaines.

Kubota, R. (2003) Critical teaching of Japanese culture, *Japanese Language and Literature* 37(1): 67-87.

Zarate, G (2003) 'Identities and plurilingualism: Preconditions for the recognition of intercultural competence' in Byram, M. (ed.) *Intercultural Competence*: 84-117, Council of Europe.

岩井朝乃, 朴志仙, 加賀美常美代, 守谷智美 (2008) 「韓国『国史』教科書の日本像と韓国大学生の日本イメージ」, 『言語文化と日本語教育』第35号, pp.10-19, お茶の水女子大学日本言語文化学会。

岩崎典子 (2013) 「留学前後の日本語学習者の日本観・日本語観 —複文化複言語使用者として—」『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 研究年報』第9号, pp.175-182, お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター。

川上郁雄 (1999) 『『日本事情』教育における文化の問題』, 『21世紀の『日本事情』—日本語教育から文化リテラシーへ』第1号, pp.16-26, くろしお出版。

姫田麻利子 (2013) 「大学生の言語ポートレート」『語学教育研究論叢』第30号, pp.213-232, 大東文化大学教育研究所。

細川英雄 (2002) 「日本語教育におけるステレオタイプと集団類型認識」, 『早稲田日本語教育研究』, pp.63-70, 早稲田大学大学院日本語教育研究科。

「移動する子ども」の複言語・複文化そしてアイデンティティを考える

川上 郁雄（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

1 はじめに：「移動する子ども」とは

近年、大量の「国際移民」が世界各地に生まれている中で、その子どもたちが以前よりも注目されるようになった(Eidse & Sichel 2004, Parrenas 2005, 長坂 2011, 関 2013 など)。その背景には、経済のグローバル化にともない、大人が仕事を求めて国境を越えて移動し、それにともない子どもが大人とともに移動せざるをえない状態に置かれる現象があり、その結果、家族のあり方から子どもの生活まで多岐にわたる新たな問題が発生しているからである。さらに、それらの問題に対してこれまでの学術的知見では十分に対応できない状況に多くの人々が気づき始めているからであろう。

これらの子どもの課題は、国籍、生活、教育、アイデンティティ、人権など個人の生き方から社会のあり方まで多岐にわたるが、本稿では、幼少期より複数言語環境で成長する点に注目する。なぜなら言語教育の立場からこれらの子どもの課題を捉える必要があると考えるからである。そのため、子どもたちの複言語に関わる、「抽象的で数値化することができないものであるが、重要な研究対象である」といわれる「言語への気づき」「言語意識」(山川 2010)に焦点を当てる。本稿では、これらの、幼少期より複数言語環境で成長する子どもに対して「言語バイオグラフィ・インタビュー」(姫田 2012)を行い、彼らの「言語への気づき」「言語意識」をもとに彼らが自らの複言語能力・複文化能力についてどのように考え、生きているのかについて明らかにする。分析に際しては、言語間、空間、言語教育カテゴリー間を移動して成長する経験への意味づけと記憶という含意の「移動する子ども」(川上 2011、2013)を分析概念として利用する。

2 事例検討：「難民」として来日した親を持つ子どもたち

本稿で考察する対象は、ベトナム難民として来日した親を持つ二世世代の若者たちである。ベトナム難民が日本に受け入れられた経緯や定住後の生活世界については川上(1999、2001)が論じている。これらの二世世代の若者の多くは日本で生まれ、日本語を使用して生活している。親の世代が持つ難民体験を子どもたちは必ずしも共有していない。子どもの中には、すでに日本国籍を取得し、法的には「日本人」の若者もいる。これらの若者を、本稿では「調査協力者」と記す。

本稿のもととなる調査は、2014年1月より3月に東京、神奈川、京都、兵庫で行った。調査協力者は18歳から25歳の男女9人であった。インタビューは本人の了解を得て録音し、のちに文字化した。その後、内容について本人の確認をとってから文字化データを分析した。項目ごとにラベルを貼り、カテゴリー化して整理した。その結果、3のテーマが浮上した。①幼少期の他者への気づきと複言語への気づき、②十代の成長期の自己認識、③無国籍とアイデンティティ形成であった。本稿では、以下のふたつのケースの概略を紹介する。以下の括弧付きの引用は本人たちの語りの一部である(詳細は、川上 2014、印刷中を参照)。

2.1 事例 1. 藤田蘭さんのケース

藤田蘭さん(仮名。以下、蘭さん)は1994年、関西で生まれる。20歳の女性で、大学生である。父親はボートピープルとして来日した。中国系ベトナム人で、広東語とベトナム語を話す。母親は、呼び寄せ家族としてベトナムから来日した。ベトナム語を使用する。家庭内言語は、広東語、ベトナム語、日本語である。

① 幼少期の他者への気づきと複言語への気づき

蘭さんは小学校低学年のとき、学校で聞く日本語がわからなかった。「何を話しているかわからない。宿題を出されても、わからない。で、聞く人もいない」。「親が話している言語が違う」し、「名前がカタカナ」であることに気づく。友だちの間でも、蘭さんは「あたしが気づくと同時に、・・あっち・・相手も気づく・・」、そして「おまえ外国人なんだろうって」言われて、「で、国に帰れよとか言われたりとかして」。でも、「私がずっと生まれて育った場所がここなのに帰る場所はないじゃないですか」と語る。

家庭でも、蘭さんは、親が病院へ行くときの通訳をしたり、役所に出す書類の代筆をしたりした。親には、「学校へ行っているイコール日本語が全部わかっていると思われる」し、「日本語ができるだけで全部できるって思われている」と蘭さんは感じていた。

② 十代の成長期の自己認識

蘭さんは、公立の中高一貫校を受験、合格する。多様な背景の生徒がいて、日本人が少数派の学校であった。「最初の会話が、もう『どこの国の人?』から始まる。(日本語以外に)『何語しゃべれるん?』と自然に聞かれる」。そのため、「学校、良かったですね」と語る。

しかし、大学生になって、カタカナ名を日本名に変えた。その理由は、「たとえば仕事・・・アルバイト探すときとかに名前を言うだけで、『ああ外国人なんだ』っていう、『私のところは、ちょっと外国人は受け入れていないんで』って、外国人というだけで断られるんで、名前を通名(日本名)に変えたという。

③ 無国籍とアイデンティティ形成

蘭さんの親はベトナム難民として入国し、定住しており、その両親のもと蘭さんが日本で生まれているため、現在も、法的には無国籍の状態にある。そのような蘭さんは自分自身を「ちょっと外国語ができる日本人だと思っているんで」と語る。そしてベトナム語は「オプション」とみなし、今、ベトナム語を勉強しているという。なぜならベトナム語は「売りにできると思います」。言語能力については、「順番的には、日本語、ベトナム語、中国語」「ベトナムにつながってる部分もうほんとに親だけなんで、ないんですよ、ほんとに。ベトナムに帰ってもそんな・・・懐かしいとか思うのもないし」、「ほんとに日本人と変わらない」と蘭さんは語る。

日本国籍について蘭さんは、「ほんと日本人と変わらなく生きていけるんですけど・・・親からもらったベトナムっていうのもなくなってしまうっていうのもなんかちょっと葛藤があります」。「私は難民としてずっと再入国(許可書)で生きてもいいかなって」思っているという。

2.2 事例2. グエン・ニャット・ハイさんのケース

グエン・ニャット・ハイさん(本名。以下、ハイさん)は、1988年、関東で生まれる。25歳の男性で、大学生である。父親はボートピープルで、救助されて来日した。母親とベトナム生まれの姉は、その後、呼び寄せ家族として来日した。

① 幼少期の他者への気づきと複言語への気づき

家庭内言語についてハイさんは、「基本、ベトナム語。両親とはベトナム語、姉弟とは日本語」を使用している。「両親が日本語、少ししゃべれるんですけど、なんで日本語、だめなのかっていうのは、子どもの時、思いましたね。んー、ちょっと嫌でした」と語る。

ハイさんは子どもの頃、家庭でベトナム語を学習させられた。「両親に教わってたんです。(中略)ひたすら書いて覚えて読んでっていうのを、1日1時間くらいやってたんですけど。ものすごく嫌でした。日本語でも大変だったのに、なんでこれでまたベトナム語を……って、常に思っていました」という。ベトナム語を勉強するのが嫌な理由としてハイさんは、「正しく発音しているつもりでも、両親からしたら違う、っていうやりとりが苦痛。……正直苦痛でした。まあベトナム人としてはやらなきゃいけないのかなあって」思いつつ、ベトナム語を勉強していたという。

ハイさんは、ベトナム名をカタカナ表記した名前を使用している。カタカナ名なので、すぐに友だちや先輩に覚えてもらいやすいので得だったと語る。両親は学校の勉強をみてくれることはなかったが、「毎日、勉強しなさい」と言った。勉強でわからないことは兄や姉に聞いた。

② 十代の成長期の自己認識

ハイさんは、小学校5年から中学3年まで野球をやった。その野球について「楽しかった」、「地道な努力をしておけば結果が出るのかなってことも学ぶことができました」と語る。高校時代は、勉強とアルバイトに専念した。週5日、午後5時から10時まで、スーパーでアルバイトをした。アルバイトで稼いだお金は、半分は学費に、あとは両親に渡し、残りは貯金に回した。高校では、友人や先生の信頼も高く、「学校の先生からの評価も高かった」という。

③ 無国籍とアイデンティティ形成

ハイさんは、高校卒業後、オーストラリアの大学へ進学したいと思った。ハイさんは蘭さんと同様に、両親が難民として入国し、その両親のもと日本で生まれたので、法的には無国籍であった。そのためパスポートがなく、日本を出国するときには、日本政府が発行する再入国許可書を使用しなければならない。ハイさんはオーストラリアへのビザ申請の際にも、また実際にオーストラリアの空港に着いて入国するときも、再入国許可書を提示すると、さまざまな質問を受けたという。たとえば、オーストラリア入国時には、「再入国許可書っていうのがあるんですけど、「これ何だ」みないな」質問をされたり、留学ビザ申請したときの豪州大使館に「「これじゃだめだ」って言われました。「でもこれしかない」って言い通したんで……」、なんとかオーストラリアへ入国できたという。

しかし、ハイさんがオーストラリアの英語学校で英語を学んでいるとき、次のようなことがあったと話す。「初め、日本で生まれたんで、日本人って言うんですけど、名前を見て「お前、ベトナム人じゃん」っていうことを言われるようになってから、「俺、ベトナム

ム人を隠すのもどうかね」って」と思うようになり、「それ以後ベトナム人で通してましたね」と語る。

つまり、オーストラリアで今のベトナムから留学している「ベトナム人」に出会ったり、オーストラリアで生活しているベトナム人を知ったりして、ハイさんは「変わりましたね。何が悪いの・・・ベトナム人の何が悪いのかくらの気持ちで生活していました」と語る。現在は、「気持ち的には、このままずっとベトナム人で生きていこうかなって」思っているという。ハイさんはその後、オーストラリアの大学へ進学し、2014年末には卒業する。

では、今後はどうするのかの質問に対して、ハイさんは、「この先も日本に住みたいと思うくらいなので、やっぱり生まれた所なのかなって。一番言語が喋れるのも日本語ですし、生活長いのも日本ですし、やっぱり日本が強いのかなってというのはありますね」と将来を見据えている。

ハイさんは、自分のベトナム語能力についての自己評価は「日常会話程度」という。インタビュー時には就活中で、オーストラリアの大学を卒業して、日本語、英語、ベトナム語を有効に使えるような仕事を探していると語っていた。また、将来は、兄と同じように、ベトナム名を変えず、「日本国籍取得」を視野に入れているという。

3 考察

3.1 複言語性とカタカナ名

難民として来日した両親のもと、日本で生まるといふ同様の背景を持つ二人の若者、蘭さんとハイさんの語りには共通点と相違点がある。以下、その意味について考察してみよう。まず、幼少期の複数言語環境である。二人は、家庭内言語はベトナム語で、外で日本語を使用した。蘭さんの場合、広東語も加わる。親と自分の関係では、親から通訳者や翻訳者と見られることを蘭さんは負担に感じていた。ハイさんは、親が学校の勉強は見えてくれないことや親の日本語力の低さに小さい頃から気づいていた。

このように幼少期より複数言語環境で成長することを、ここでは、「複言語性」と呼ぶ。自らの複言語性についての捉え方は、人によっても異なるだろう。ハイさんはベトナム語学習が「正直、苦痛でした」と話した。二人とも幼少期より、家庭内言語から自らの複言語性に気づいていたが、学校でのカタカナ名使用による他者のまなざしは自らの複言語性を考えるうえで大きな要素となっていたと思われる。たとえば、蘭さんは「外国人」「国に帰れよ」と言われ、強い反発を感じた。ただし、自分のカタカナ名について、ハイさんは「覚えてもらいやすいので得」と肯定的に捉える。カタカナ名についての捉え方の多様性があることを窺わせる。

3.2 十代の社会的環境

幼少期からの複言語性についての捉え方や考え方は、成長過程によって、また環境の変化によって変化する。たとえば、蘭さんは、中高一貫校に入学し、自らの複言語性を肯定的に捉えるようになった。一方、ハイさんは、野球や勉強、アルバイトを通じて、「地道な努力は結果が出る」という人生経験を積むことにより、学校や社会での評価を高め、自信を深めていく。その中で、ハイさんは自己肯定感・自己有能感を持つようになり、ハイという名前を肯定的に捉えるなど、自らのベトナム人性がマイナスにならないと感じるようになる。

3.3 無国籍と自己表象

しかし、ふたりとも、再入国許可書から無国籍を意識するようになる。蘭さんは、大学生になって通名(日本名)に変更し、自らのベトナム人性を隠すようになった。ただし、就活ではベトナム語能力を売りにできると考えているが、ベトナムとのつながりは親だけであって、ベトナムに対して懐かしさを感じることもないと話す。蘭さんは、「名前は違うが、日本人と思っている」と自らを語る。日本との距離感の方がベトナムとの距離感より強い。ただし、日本国籍を取る気持ちになれず、「無国籍」で生きる道を今は考えている。その理由は、日本もベトナムもどちらも否定したくないからだという。一方、オーストラリアへ行ったハイさんは、オーストラリアで日本人と語る自分を振り返り、自分の中にあるベトナム人性を自覚するようになり、「ベトナム人の何が悪い」と思うようになった。就活では、日本語、英語、ベトナム語を売りにしたいとハイさんは言うが、将来、日本国籍を取らうと話す。ただし、名前はベトナム名でいきたいとも語る。蘭さんと同様に、日本人性とベトナム人性が同居しているように見える。

4 まとめ：「移動する子ども」という記憶

蘭さんとハイさんのケースは、私たちに何を語るのか。日本で生まれ育った二人とも、幼少期より複数言語環境で成長するという複言語性を有している。ただし、親の言語であるベトナム語の継承においては、「日常会話」程度と語り、必ずしもベトナム語継承学習者としては「成功」しているわけではない。また、成長過程では、二人にとって、ベトナム語使用やベトナム語学習は、苦しい経験であり、負担となっていた。しかし、二人は大学生となってから、ベトナム語を学び直し、就活ではベトナム語能力を「売りに」したいと考えている。

このような生き方は、自らのベトナム人性を活かす生き方のように見える。そのような生き方を選択する背景には、自らの複言語性が関係していると思われる。たとえば、蘭さんは、日本名を使うがベトナム人性を捨てきれないという。ハイさんは日本人と名乗ったが、「ベトナム人で何が悪い」と思った。蘭さんは「難民として生きていく」道を選択し、ハイさんは将来「日本国籍」を取り「日本人」となるだろうが、名前はカタカナ名を選ぶつもりだという。これらの生き方は、現在進行形の自己表象の選択の結果と見てよいだろう。ただし、この自己表象は自らの判断だけで行われるのではなく、社会的文脈、社会的評価、他者のまなざしの影響を受け、社会的に構築されるということだ。したがって、自己表象は子どもの成長過程やライフコースによっても異なってくる。その意味で、自己表象は変化し続ける。つまり、そういった自己表象の動態性と多様性の根源には自らの複言語性があると考えられる。

「移動する子ども」という記憶(川上 2013)は、幼少期より複数言語環境で成長するという複言語性と一体である。その記憶は、家族、学校、友人、アルバイト先の人等、他者との関わり、他者のまなざし、他者の評価、他者との相互作用によって形成される。その意味で、「移動する子ども」という記憶は、個人の記憶ではなく、社会的に構成され、人を作ることを意味する。

ここで、新たな課題が出てくる。蘭さんやハイさんをどのようにくくるのかという課題である。彼らを、もはや、「ベトナム難民2世」と呼ぶことはできないであろう。そのよう

に名付けても、彼らの複言語性の生き方をなんら理解したことにはならないからである。「ベトナム難民2世」という呼び名は、研究者の名づけの暴力と言わざるを得ない。「中国帰国者日本生まれ3世」や「日系ブラジル人」も同様である。「名付け」は、政治的、操作的、暴力的に行われる。つまり、親の国籍やエスニシティで子どもをくくることはできないのである。

むしろ、私たちの今後の課題は、「移動する子ども」という記憶の研究対象化である。その研究は、子どもの複言語性に注目した、子どもの複合的な生を総合的に捉える研究といえよう。さらに、そのことによって、子どもたちが自らの多様な言語的資源へ気づき、自らの記憶をメタ的に捉え、自らの複言語性と向き合う自己を確立することを可能とする教育実践の構想であろう。蘭さんとハイさんのケースは、そのような課題を私たちに突きつけているのではないか。

<参考文献>

- Eides, F. and Sichel, N. (eds.) (2004) *Unrooted Childhoods: Memories of Growing up Global*. Boston: Intercultural Press. Inc.
- Kawakami, I. (2003) Resettlement and Border Crossing: A Comparative Study on the Life and Ethnicity of Vietnamese in Australia and Japan. *International Journal of Japanese Sociology*. No. 12: 48-67.
- Parrennas, R. S. (2005) *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.
- 川上郁雄 (1999) 「越境する家族—在日ベトナム人のネットワークと生活戦略」『民族学研究』第63巻4号, pp. 359-381.
- 川上郁雄 (2001) 『越境する家族—在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店.
- 川上郁雄 (2011) 『「移動する子どもたち」のこぼれ話の教育学』くろしお出版.
- 川上郁雄 (2013) 「「移動する子ども」学へ向けた視座—移民の子どもはどのように語られてきたか」, 川上郁雄編 『「移動する子ども」という記憶とカーことばとアイデンティティ』 pp.1-42, くろしお出版.
- 川上郁雄 (2014) 「「難民」として来日した親を持つ子どもたちの記憶と自己表象—複言語と無国籍の間で—」, 『比較日本文化研究』17号, pp. 48-70.
- 関 恒樹 (2013) 「越境する子どものアイデンティティと「家族」の表象」, 『文化人類学』第78巻3号, pp.367-398.
- 内藤直樹・山北輝裕編 (2014) 『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』昭和堂.
- 長坂格 (2011) 「フィリピンからの第一・五世代移住者—子ども期に移住した人々の国際比較研究へ向けての覚書」, 上杉富之(編) 『グローバリゼーションと越境』, pp.49-83, 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター.
- 姫田麻利子 (2012) 「複言語・複文化経験とアイデンティティ」, 『語学教育研究論叢』29, pp.243-264.
- 山川智子 (2010) 「「ヨーロッパ教育」における「複言語主義」および「複文化主義」の役割—近隣諸国との関係構築という視点から」, 細川英雄・西山教行編 『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』, pp.50-64, くろしお出版.